

Title	山形懸大山町の石敢當
Sub Title	
Author	國分, 剛二(Kokubu, Goji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.2 (1930. 6) ,p.138(310)- 138(310)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0138">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300600-0138</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 山形縣大山町の石敢當

西村眞次氏は『日本研究』第一冊に「石敢當の研究」と題して三十四頁も執筆されて居る。此の石敢當は東北の酒の名産地山形縣西田川郡大山町大字大山十三番の宅地と道路(縣道?)の界にも建てられて居る。其の形状は 稍々尖頭形の石牌にして高さ二尺八寸 幅一尺八寸位のものにて、前面に石敢當の三字、其の下部に武者の像を刻ん居るこ、莊内(東田川・西田川・飽海)三郡史蹟名勝天然紀念物調査書に掲つて居る。因に今は此の石牌は道路上に土砂を布く毎に漸次埋没し、今は僅に石敢の二字を地上に顯すに過ぎず、さあるが、私の初めて見た時は 石敢當 の三字は兎も角も讀むことが出来てあつたが 武將像が刻られて居る事は、思ひも付かなかつたのみならず、近所の人、二、三名から聞いても知つて居る人がなかつた。尙ほ此の石敢當は何時代に建てたものであるか、何人が建てたものであるか、何の爲に建たものであるかを知つて居る人も無かつたやうであつた。尙又、此の大山は昔は相當に盛な町で戰國時代には大泉の武藤氏が居り、徳川時代には莊内鶴岡酒井侯の支藩であつたが、大山酒井侯は嗣子がなかつた爲めに一代で滅んだので、其後は幕府の領地になつて明治の數年前に至つたのであつた。蓋し大山の近傍の西目には支那の彫刻型あると云はるゝ石の聖觀世音菩薩立像を寶物として居る縣社荒倉神社(元は荒倉馬頭觀世音)といふ西羽黒の稱ある名所もあり、淀川には白鬚神社といふて石の雞が狛犬の代理を務めて居る宮もあり、馬町には丹波のメツケ犬が武者修行者に味方し猿を討取つて祭の犠牲になる娘を救つた傳説のある縣社相尾神社もある。此の相尾神社には狗犬の代りにメツケ犬が二匹番をして居るのである。此他、北海道の漁場から數千圓といふ多額の豐漁の御祈禱料を送つて來、又た此寺の五重塔を建てた大工が片眼になつた傳説のある善寶寺や龜の傳説ある日本海岸の湯野濱溫泉や、鷺の傳説のある湯田川溫泉も、遠くはなく、鶴岡市からなら西方二里の土地である。

昭和五年六月二十三日

國 分 剛 二